
驚見家の弟と、

悪者はいない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鷲見家の弟と、

【Nコード】

N2010W

【作者名】

悪者はいない

【あらすじ】

ある夜、鷲見家の弟は異世界から現れた吸血鬼^{ドラキュラ}さんと出会った。

その日を境に、弟は家族と共に様々な“者”と交流することに。

作り話が得意な弟と、異世界では嫌われ者の吸血鬼さんの一風変わったやり取りはいかが？

作者

は“吸血鬼”や“透明人間”の知識はありません。ご理解のほどよろしくお願い致します。

吸血鬼さん？（前書き）

もうすぐ夜になる。

弟は自室で開いた本を指先でなぞり読書を楽しむ。

開けっ放しの窓から夜風が頬を撫でた。

肌寒いけれど薄手の長袖だから風呂上がりも平気。

キキ

一匹のコウモリが鳴いた。

それは意思をもって弟の部屋に近づく。

バサバサと翼を動かす音に気づいた弟はパタンと本を閉じた。

顔を窓の方に向ける。

屋根の上に誰か立っている。

血の玉のように赤い瞳の男が周りにコウモリを従え、ジッと弟を見つめていた。

その視線に気づき、ニコと笑む。

「こんばんは、吸血^{ドラキュラ}鬼さん。」

「ああ。」

今夜は冷える、風邪をひくなよ。」

「ありがと。」

藍色のポンチョと癖のある髪を摩かせ、音もなく部屋に踏み入れた。
男の背には黒いコウモリのような翼が生えていた。

吸血鬼さん？

静けさが残る月夜の晩。

黒猫が妖しげに光る月を金色の瞳に映し、犬は叫ぶように夜空に吠える。

コウモリは群れをなして狩りの範囲を広げ、保育園帰りの子供は母親と手を繋いでお遊戯の唄を歌う。

その汚れを知らない純粹無垢な丸い目があるモノを捉えた。

黒いコウモリを周りに従えた、赤い瞳の男。

肩につかない長さの髪は癖があり、宙に浮く体の縁を月光のようにぼやけた光が包む。

紫色のポンチヨの上から黒い翼を背中に生やした中肉中背の背丈。

目にかかる少し長い前髪を夜風に靡かせ、男は薄い唇に人差し指をそつと添える。

魅せられたように男から目を離せない子供を母親が心配そうに伺い、ハツと我に返った子供は慌てて作り笑いを浮かべる。

母親を心配させまいとした子供心。

それに気付かないフリをした母親も慈愛に満ちた優しい笑みを子供に降り注ぐ。

チラリと子供はもう一度星が瞬く夜空を仰いだ。

しかし、男の姿は何処にもなかった。

あるのはただいるだけで夜を支配する橙色の月だけ。

バサササ…

何処かでコウモリが羽ばたく音が聞こえた。

何処にでも在りそうな二階建ての一軒家。

インターホンの上に「驚見」と彫られた表札が飾ってある。

特に何の悪評も中傷もない四人家族の家。
ただ、少しでも近所で噂が流れている。
それを知らぬ一匹のコウモリが音を殺して忍び寄る。

…コンコン

二階の窓を誰かがノックした。

その部屋は前髪が異常に長い弟の自室。

因みに隣は大雑把な姉の部屋である。

カーテンがしまっていて窓の外は見えない。

ノックした向こう側は屋根。

人が乗れるスペースはある。

しかし、こんな夜中に来るのは不審者しかない。

パタン

読んでいた本を閉じ、椅子から立ち上がる。

「どちら様？」

怯えも強がりも含まれていない声で質問する。

返事はない。

疑問に思った弟はベッドに膝を着き、カーテン越しに窓に触れる。

今はまだ肌寒い夜。

まだ薄い長袖が手放せない。

弟は再度問いかけた。

「誰？」

「この窓を開けてくれないか。」

やっと返事が貰えた。

この声は男性。

やはり不審者なのだろうか。

寒い中ご苦労様です。

弟は片手でカーテンを開けた。

シャッ

チカチカと点滅する電灯。

路上で鳴く一匹の野良猫。

弟の目の前に、あの男が立っていた。

橙色の月を背景にした姿は幻想的で、そこにいるのが幻のようにさえ思える。

男の耳は弟と比べると細長く、先端が尖っていた。

青白い肌でも気にならない男の容姿。

まるで、そう、映画に登場する“吸血鬼^{ドラキュラ}”だ。

弟を見下ろす男の唇から吸血鬼ならではの尖った歯が覗く。

弟は男を仰ぎながら、内容は違うけれどこれで三回目。

「何者ですか？」

「観てわからないか？」

「はい、全然。」

そうだ。今から開けますんで、中に入ったらあなたの名前教えてください。

思い出したかのように窓の鍵を開ける。

口角を上げた弟は少しだけ楽しそうだ。

男はコウモリを肩に乗せ、黙って成り行きを見守る。

カチャ

鍵を下ろし、両手で窓を開けた。

ブワァー！！

その瞬間を待ち構えていたかのように黒い物体が窓から侵入。

目をキツく閉じ、両腕で顔を守る弟は何が起こったのかわからない。

強い風が止んだのを見計らいそ〜と腕を下ろし、ペタペタと窓を触って確かめる。

何も壊れていない。

カーテンも破けてない。

顔も無傷だ。

ベッドも無事。

なら、一体何が起きたのだろう。

弟は首を傾げて考える。

「私は吸血鬼、分かりやすく言うとドラキュラだ。」

部屋の方から声がした。

弟が顔をそちらに向けると男が足を組んで椅子に座っている。

そして興味なさそうに弟の本をパラパラと捲り、パタンと閉じた。

「吸血鬼？ドラキュラ？」

「なんだ、お前は知らないのか？」

「いや、知っていますけど。本当に吸血鬼ドラキュラなの？」

ベッドに腰掛けて話を聞く。

すると男は気を悪くしたのか口をへの字に曲げてしまう。

見た目が二十代の割には短気らしい。

腕組みをして顔を逸らし、ブツクサと愚痴を呟く。

全く、気が小さい男だ。

タタッ

ずっと男の文句に耳を傾けていた弟が突然走り出した。

不意を突かれた男は一步反応に遅れてしまった。

「しまった！」

貴重な食料が。

と思われていた弟は部屋の扉を勢いよく開けた。

バン！

その口元は完全に喜びに満ち溢れている。

男が手を伸ばした先で弟は目一杯大声を張り上げる。

近所迷惑も気にせずに。

「俺の部屋に吸血鬼キターーーーー！！！！！」

パコーン

吸血鬼は掴むより先に弟の頭を叩いた。

弟の奇声にぞろぞろと集まる驚見一家。

平社員の父に、専業主婦の母。

眼鏡を上げて珍しそうに男を確認する父は『本物か』と多少ビックリしている様子。

その隣で母は口に手を当て『あらあら』と言うがあまり驚いていない。

大学生で面食いの姉は頬を染め、うつとりとした表情。

家族の間に立っていた弟はニコニコと笑み、腰に手を添え自慢気に鼻を鳴らす。

四人の前で注目を浴びる男は気まずそうに弟の机で頬杖をつき、遠い目で窓の外を眺めていた。

ポンポン

頭を軽く叩かれ忌々しげに振り返ると、男が不機嫌である原因の弟がいた。

こんなに近いのに相変わらずうつうつとした前髪で顔が見えない。

弟はポンポンと男の頭から肩、肩から腕、と手を移動させていく。

その意味がわからず不審な目で睨んでも弟は止めない。

「姉ちゃん、吸血鬼さん美人？」

「そりやもうあたし好みのイケメン！！！」

長い耳を興味深そうに触りながら姉に質問する。

こんな間近にいるのにわざわざ別の人間に聞く弟の心意がわからない。

男の顔を両手で優しく包み、顔のパーツを確かめるように触れている。

顎、唇、頬、鼻、瞼と下から徐々に上っていき、最後は髪の毛。

やわやわと犬を撫でるみたいに両手が動きが嫌なのか、男は弟の手を掴んで片手でくるくる。

「いい加減にしてくれ。私は動物ではない。」

「吸血鬼さん、綺麗な顔してるね。体温は低いけど肌スベスベ。姉ちゃんよりも髪の毛ふわふわしてて気持ちいい。」

「…今更綺麗と言われても嬉しくないんだが。もしや馬鹿にしている？」

上機嫌で褒める弟に悪意は込められていない。

素直な感想を述べただけなのに男の怒りを買ってしまったっている現状が上手く飲み込めない。

日本人特有の黒い髪を揺らして顔を近付ける。

前髪が男の額にかかるまで近付き、男はあることに気づいた。

弟の意味不明な言動が漸く理解出来た。

こんなに前髪が長ければ気付かない。

「吸血鬼さん、どうして怒ってるの？」

「お前、盲目か？」

こんなに近いのに視線が交わらない。

目の前の二つの瞳は忙しなく動き、焦点が定まっていけない。

仮に目の前で手を振っても無反応。

無視しているのではなく、手に気付かないだけ。

スツと瞳が閉じられた。

「微かにだけど光と暗闇の判別は可能だよ。

あ、もしかして吸血鬼さんそれで怒ってたの？ごめんごめん。先に言えば良かったね。」

「あ、いや、えと、お前が謝ることは、多分ない。私も悪かったところはある。すまない。」

明るく謝る弟としどろもどろ謝る男の温度差。

悪いと思ったことはキチンと謝る男、もとい吸血鬼さん。

何を言えば良いのか混乱している吸血鬼さんに胸キュンな姉は終始幸せそう。

大きめの胸の前で手を合わせて目の保養中。

後日友達に自慢することだろう。

グウウウ

突然誰かの腹の虫が呻き声をあげた。

その音は切なさを感じる音色で、よほど腹が空いてると感じられる。

発生源は晩御飯を食べ終えた驚見一家の腹からではない。
となると、残るは一者。

椅子の上で頭を抱えて縮こまっている、耳がほんのり赤い吸血鬼さん。

ポンチョの中に折り畳んだ足を腕で胸に着くまで引き寄せ、膝に顔を押し付ける。

恥ずかしくて頭から湯気が出る吸血鬼さんに微笑みを向ける夫婦。

「母さん、吸血鬼さんに食事を作ってくれ。」

「わかりました。」

吸血鬼さん、食べれない物がありますか？」

「いや、お構い無く…。血しか飲まないのです。」

ポツリと呟いた言葉に姉がすかさず挙手をした。

その瞳は期待に夢見る乙女のようにキラキラ輝いている。

姉が発言する前に吸血鬼さんが宣言した。

「私は処女^{オトメ}が童貞^{セイジヤ}の血しか飲まない。この二つの人間の血が一番美味しい。」

ガンー！！

姉は110のダメージを受けた。

部屋の隅でしくしく泣く姉を父は複雑な気持ちで慰める。

子供がいる時点で吸血鬼さんの候補から除外されている夫婦。

誰も気付かない間に母は階段を下りて台所に。

空腹と恥に耐える吸血鬼さんの周りを心配そうにコウモリが飛び交う。

クイクイ

吸血鬼さんの背後で軽く二回ポンチョを引っ張る弟。

微かな光と暗闇しか判別出来ない瞳は閉じられており、今の状況を理解していない。

遠慮なく弟の肩や頭に乗る取り巻きのコウモリ。

何故か主の吸血鬼さんよりも寛いでいる。

椅子の上で小さくなっている者が振り返ると、不思議そうな顔と出

くわした。

体にかかる重みや羽ばたく時にかかる風も気にせず、弟はわしゃわしゃと吸血鬼さんの髪を撫で回す。

指通りのいい柔らかい髪がボサボサになる。

最後にポンと頭に手を乗せニコツと笑む。

これは顔が見えない弟の慰め方。

殆どが嫌なことがあった姉にしてやっている。

愚痴を聞き終えた最後にコレをすると効果大。

しかし、吸血鬼さんは初めての体験。

どう反応すれば良いのかわからず固まっていた。

何時もなら喜ぶ姉の笑い声が聞けるのに、今回は無反応。

おかしいな、と思いながらも一回。

ガシッ

だが、止められた。

困惑気味の吸血鬼さん。

頭上に？を沢山浮かべている。

突然手首を掴まれても触ろうとするのか、手の動きは止まらない。

力は吸血鬼さんの方が強いが、弟も負けてはいない。

いいなー、と半口を開けて羨ましがる姉の頬は桃色のまま。

その横で胡座をかいて見守る父は欠伸を漏らす。

仕事の疲れが溜まっているのだろう。

コックリコックリと舟を漕ぎ、とても眠たそうだ。

二者の攻防戦が続く中、ふと見上げた先に弟の首筋。

吸血鬼にとって一番飲みごたえのある部位。

それを見た途端、カツ！と赤色の瞳が瞳孔を開いた。

歯がガチガチと喧しく鳴り、犬歯が鋭さを増す。

「フウー、フウー、」

野性の本能が爆発せぬよう理性が必死に制御するが、それも時間の問題。

膨れ上がった欲望に打ち勝てるほど強くつくられていない。

しかも断食して数週間が経つ。

飢えに苦しむ吸血鬼さんに目の前のご馳走は毒。

その首筋に吸い付いて、体が干からびるまで飲み干したい。
喉を生ぬるいモノで潤いたい。

この歯を肌に食い込ませたい。

しかし、コイツは盲目だ。

これ以上苦しむのは酷ではないか。

別の人間で、いや、もう動けない。

この場で食すしか、でも何か嫌だ。

様々な感情が入り交じり、血を飲むのを躊躇われる。

ドン

弟をベッドの方に突き放して距離を置く。

肩や頭上で休んでいたコウモリ達がバササと弟から離れた。

それほど強く押していないから弟は無傷。

その行為に怒った姉は吸血鬼さんに殴りかかろうと立ち上がる。

「ちょっと吸血鬼さん！あたしの弟に何してるのよ！？」

「落ち着きなさいお姉ちゃん。吸血鬼さんはいま混乱してるんだ。

ほら、あの子は無傷だ。」

いくらイケメンでも弟に手を出す奴は許せないらしい。

落ち着いた態度で宥める父に肩を掴まれ、姉はキュと下唇を噛み締める。

先程のメロメロの恋心は何処へやら、キツと怒りと牽制を含めて吸血鬼さんを睨む。

二人の目の前で強く己の体を抱き締める男は欲にジツと堪えていた。
緊迫した空気の中、場違いな声がベッドの上から聞こえる。

「ビックリした。吸血鬼さんどうしたの？」

ゆっくりベッドから起き上がり、真っ直ぐ吸血鬼さんに手を伸ばす。
しかし距離がある為、その手は何も触れられない。

そうとは知らぬ弟は両手を前後左右に動かして闇雲に吸血鬼さんを
探す。

無思慮な行為に諦めは存在しない。

ただ探し者を探すだけに意識を集中させる。

「吸血鬼さん、もしや避けてる？それは酷いなあ。」

中々目的の者に出くわさないことで勘違いしたのか、ムスと拗ねた顔を作る。

本当は全く動いていないし避けてもいない。

ずっと同じ場所にいる。

しかし弟にはわからない。

ギシ

ベッドに手をついて立ち上がった。

ペチペチと左手で壁を確認し、右手で吸血鬼さん探し続行。

目隠しをした人間がするような動き。

的はずれな場所に進む弟はゴミ箱を蹴ってしまった。

中にゴミが入ってなかったのが幸いして部屋にも弟にも被害はない。コロコロと転がっていくゴミ箱はコンと音をたて椅子にぶつかり、少しずつ動きを止めた。

「あれ？そっちにいるの？」

そんな所に物があるのに気づいていなかった弟は音がした方に顔を向けた。

壁から手を離し一步一步足場を確認しながら前へ。

頼れる物がない空間で耳の記憶だけを頼りに進む。

ポン

「あ、吸血鬼さん発見。部屋が静かだから、もう帰ったかと思ったよ。」

大分遠回りしたが記憶にあるポンチョの手触りにホッと一安心。

ちよっとした仕返しにペシペシと吸血鬼さんの頭を叩く。

部屋には姉しかいない。

父は風呂に入って寝た。

明日も朝から仕事で多忙なのだ。

体操座りで吸血鬼さんの動向を伺う姉も口から大きな欠伸が漏れ、

今にも寝そうな雰囲気。

「どうしたの？」

無言でされるがままの吸血鬼さんが心配になり、肩に手を置いて顔を覗き込む。

赤い瞳の目の前に弟の首が晒される。

飢えが、理性を壊した。

グイッ！

強引に腕を引っ張られた。

長い爪で服が破けた。

よろめく弟の袖を捲り犬歯を剥き出しにする吸血鬼さん。

姉は熟睡。

危険を知らせる者はいない。

後僅かで腕に歯が食い込む。

その時、本能に従う頭に弟の声が染み込んだ。

「血を吸われても吸血鬼にならない？」

ピタ

先程の父のように落ち着いた口調。

成すがままではあるが、受け入れている訳ではない。

受け入れる理由も拒絶する理由も弟にはない。

危険だとわかっていても。

ブクリと少しだけ刺さった箇所から血の玉が二つ膨らむ。

それが重力に従い吸血鬼さんの舌の上に流れる。

待ちに待ったご馳走を溢さぬよう薄い唇を傷口に当て、一滴残らず舐めつくす。

血は少しだけだが、吸血鬼さんは天国にいるような表情を浮かべ、うっとりとした眼差しを傷口に向ける。

赤い舌で唇を舐め、やっと質問に答えた。

「それはこちら（吸血鬼）次第だ。仲間にしようとすれば人間の体

内に我々の血を流し、時間が経てば吸血鬼の完成。もしくは間隔をあまり空けずに飲みまくれば、最悪死ぬか吸血鬼になる。なったとしても下級だな。

普通、このように吸っても吸血鬼にはならない。人間の本に書いてある説明はデマカセばかりで参考にはならんぞ。」

名残惜しそうに腕から顔を離す。

ジーツと傷口を見つめる吸血鬼さんの頭上で、弟は驚くべき事を口にした。

その頃、姉はまだ弟の部屋にいた。

床に横たわりスウスウと寝息をたてている。

まだ提出するレポートが終わっていないが大丈夫だろうか。

「そうなんだ。なら、吸ってもいいよ。俺の意識が残る程度にね。殺さないでよ。」

「本当か!？」

「ただし、さっきのも含めて一つ条件付き。」

玩具を買って貰った子供のように瞳を輝かせる吸血鬼さん。

最後の言葉に一変して嫌そうな顔をするが弟には効果なし。

何となく空気で察したのか宥めるようによしよしと吸血鬼さんの頭を撫でる。

子供のわりに大人な対応である。

そんな弟は今年十九歳。

現在十八歳である。

のわりに姉より小さい。

成長期に伸びなかった結果でもあるが、両親がそれほど大きくないという遺伝子の問題も含まれていると考えられる。

けれど本人はそのことを気にしていない。

人目を気にしなくなっただから。

それが最大の理由と言えよう。

弟の手を握りドキドキしながら次の言葉を待つ吸血鬼さん。
不安を隠せない。

良くない条件ではないよう心の中で祈るのみ。

手を包む冷たい温度の細い手に弟は小さく笑った。

自分より一回り大きい手から伝わる震動が素直だったから。

「とても簡単だよ。」

これから俺と友達になつて、色んな事を教えてほしい。吸血鬼さんの事とか、吸血鬼の事とか色々。」

「……驚いた。随分と楽な条件だな。」

「友達が多い方が人生楽しいでしょ。」

キョトンとする吸血鬼さんの前でニコニコ笑顔の弟の声は弾んでいた。

吸血鬼さんもフツと微笑む。

別に条件を破つても勝手に飲んだりすれば良いのだが、たまにはこんなのも面白い、と吸血鬼さんは一者頷いた。

コンコン

開いた扉をノックする。

そこにはスパゲティが入った皿を手にした母が。

目を細め母親が子供を温かく見守る時の眼差しを二者に与える。

「血しかなかったと言われてたけど、一応スパゲティを作ってみました。良かったらどうぞ。」

コトン

弟の机の上に置きっぱなしの本を片付け、音をなるべくたてないよう皿を置く。

弟の怪我を見て状況を察したのか目尻に皺を寄せた柔らかい笑顔を吸血鬼さんに向ける。

「同意なら構わないけど、ほどほどに。ね？」

「……はい。」

語尾を強めた母の笑顔が怖かった。

母は強し。

固まったままコクリと頷いた吸血鬼さんに満足したのか、入口で爆睡する姉を起こして部屋を後にした。

「……。」

無音の部屋に二つの呼吸だけ。

吸血鬼さんは先程の傷口の上に歯をたてる。

ズブリ

そのまま肌に噛みついた。

容赦ない痛み。

「い……たい。」

目尻に大粒の涙を浮かべ、ポンチョをギュとキツく握る弟。
指先が白くなるほど強く。

ギリと歯が鳴り、初めての感覚に喉が仰け反った。

全身の血液がこの部分に集中しているようにさえ感じた。
背筋がゾクゾクする。

沸き上がる高揚感に浸りたくなる。

けど、怖い。

この感情の波に囚われてしまいそう。

コウモリに囲まれた中心でポタポタと涙が落ちた。

吸血鬼さん？（後書き）

「 という話はどうか？俺達の出会いの話。」

「 所々捏造や偽りがある。なんだあの私は。」

パソコン

「 いたっ。」

椅子に座る弟の頭からいい音が鳴った。

それを笑うように吸血鬼さんの取り巻きのコウモリが鳴く。

呆れ顔の吸血鬼さんは溜め息をついた。

叩かれた箇所を擦りながら弟はケラケラと楽しげに笑う。

懲りてない弟の額を人差し指と中指を合わせて小突き、ストンとベツドに腰掛ける。

長い足を組み、肩や頭に乗るコウモリの内の一匹を両手の器の中に入れて喋る弟を眺める。

コウモリが日本語を喋れる訳がなく、一人でクスクス笑っている。

その光景に吸血鬼さんも目を細めて笑った。

「 どうしたの？何か可笑しかった？」

「 いや、お前は何時も可笑的いから安心しろ。」

「 え、酷ーい。」

全くお前の主人はあんなことしか言えない残念な者だねー。そうかそうか、お前も苦労しているんか。大変だな。」

「 また捏造するな。」

立ち上がり片手でグイと弟の頭を押す。

しかしコウモリとの会話を止めようとしなない。

弟の周りにコウモリが集まる。

まるで井戸端会議のようだ。

頭痛がする吸血鬼さん。

クイ

不意にポンチヨを引つ張られた。

コウモリに囲まれた弟がニイと歯を見せている。

そんな弟に苦笑。

クシヤリと髪を無造作に撫で回した。

されるがままの弟の髪はボサボサに。

今度は吸血鬼さんがクツクツと喉を鳴らして笑う。

「そんなにボサボサ？」

「実験に失敗した博士のような髪形だ。」

怒らない弟の酷い髪を手櫛で直してやる。

長い爪で傷つけないよう丁寧に、少しずつ荒れを落ち着かせる。

「これ終わったら夜の散歩行こ。たまには夜の空気吸いたい。」

「いいぞ。一応、両親か姉に伝えておけよ。」

「わかった。」

机に手をついて立ち上がる弟。

先に部屋の扉を開けた吸血鬼さんに礼を述べ、コウモリと共に部屋を後にした。

橙色の満月を大勢の犬が遠吠えをする声が最後に聞こえた。

吸血鬼さん??（前書き）

カタン

「あ、吸血鬼さん。」

明日の午後一時、一緒に公園行こ。」

夜、弟の部屋に訪れた吸血鬼さんへの第一声がこれだ。
音でわかったのか、窓の方にニコニコ顔を見せている。

開けっ放しの窓から侵入した吸血鬼さんは、靴を履いたままベッドに着地。

連れのコウモリが弟の方に飛んで行き、まるで挨拶をするようにキイキイと鳴く。

超音波のイメージが強いコウモリがこういった鳴き声を出せるのは、吸血鬼さんの取り巻きだからかもしれない。

正にファンタジー。

返事をするように人差し指で近くのコウモリの腹や頭を撫でながら喋る弟。

もうすっかりコウモリとお友達だ。

汚れていないベッドを手で何回か払い、ストンと腰掛ける。
足を組んで弟を眺めた。

「基本的に、昼間は体力回復の為に睡眠をとる、と以前話した気がするが。このやり取りは今日で何回目だ。」

「十回前後だよん。」

両手で10と示す。

悪意のない弟に何十回目かわからない深い溜め息を零した。

吸血鬼さん??

白い日傘を差した男が宙を舞う。

緑のポンチョを身に纏い、手には薄地の白い手袋をはめている。
直射日光を防止するような完全防備。

取り巻きのコウモリは数十匹だけ従え、後は自宅で待機。

コウモリも太陽を見ただけで目が焼けただれてしまうからだ。
主のポンチョの中で飛行を手助けする。

背に生やした翼を極力小さくし、赤色の目の男は急いで目的の場所
へ向かった。

土曜日の午後。

今日は良い天気。

洗濯物がよく乾いて主婦達には嬉しいが、家族の分の昼食を作るの
が面倒臭い。

ピンポン

住宅街に立ち並ぶ驚見家のインターホンが鳴った。

駆け足で玄関に向かう母。

約束の時間より少し早い。

扉に手をつけて向こう側の人に問うた。

「吸血鬼さんですか？」
ドラキュラ

「ああ。」

ガチャ

短いやり取りで疑いもせず扉を開ける。

目の前には青白い肌に、血に染まったように赤い瞳。

細長く先が尖った耳、鋭利な犬歯が唇からはみ出ている。

日傘を差して空を飛んでいたあの男だ。

外見通り男は吸血鬼。

驚見一家には『吸血鬼さん』と呼ばれている。

「いらつしゃい。あの子ならリビングで待ってるわ。」

「そうか。」

「今日は一日よろしくね。」

優しく微笑む母に何度か頷く。

今日、吸血鬼さんが危険な昼間に現れたのは、弟との約束を果たす為。

夜は自身もコウモリも太陽に怯えず、安心して会いに行ける。

が、体力の消耗が晴眼者よりも早い弟とはあまり話せない。

決まった時間帯に寝ないと後日に響くからだ。

それが残念な弟は時々、こうして吸血鬼さんとお出掛けする約束を取り付ける。

勿論、吸血鬼さんが空いている日を選んでいる。

家の中を安全だとわかっているコウモリは一斉に主のポンチョから家の中に移動。

バサバサ

迷わずリビングに飛んでいくコウモリは、白く細長い杖を握ってソファに座る人物に群がる。

帽子の上や肩、鞆の中に侵入する奴までいる。

それがコウモリだと気づいたのか、前髪が長くて鼻先と口しか見えない顔を上げて嬉しそうな声をあげる。

膝の上に乗る内の一匹をそつと掬い挨拶。

「いらつしゃい。君達も来てくれてありがとね。」

キィキィ

小さく笑む弟の言葉に返事をするようになくコウモリ。

カーテンで閉じられた部屋に日光は入ってこず、バサバサと羽を伸ばして飛び回る。

コウモリが吊り下がって休みやすいよう、リビングの壁と壁の間に幾つか長さ調整が可能な棒が掛けてある。

階段の窓には柄付きの板を斜めに立て掛けて、なるべく日光が入らないように。

全て母のささやかな配慮である。

バササ

何匹かが何処かに飛んでいった。

弟は顔だけ動かす。

リビングの入口に吸血鬼さんが壁に背を預けて立っていた。

腕を組み指先にコウモリを乗せる姿は絵になる。

「声かけてくれればいいのに。まだ気配だけでわからないよ。」

「私は急いでいない。それに、コウモリに休息が必要だ。」

悪びれる様子は微塵もなく、周りのコウモリを部屋に放つ。

すると弟を囲んでいたコウモリも飛び、部屋に設置された棒に吊り下がり休憩。

鞆の中に一匹だけ残っているが吸血鬼さんは特に気にしなかった。

「そろそろ行くか。忘れ物はないな？」

「オッケー。」

肘掛けを使って立ち上がる弟を自分の位置に来るまで眺める。

手は貸さない。

盲人用の白い杖を床にタンタンと当て、障害物がないか確認しながら歩く。

足取りは遅いが確実に。

焦らず急がすけれど早めに。

トン

杖の先端が吸血鬼さんの靴に当たった。

そういえば出会った当初からずっと土足で歩いている。

しかし床は汚れていない。

だから母は何も言わないでいる。

汚していたら鬼の形相で叱るだろう。

きっと逃げようとしても逃がさない。

それが母親。

やる時はやる。

問答無用で。

杖についている紐を手首に通し、吸血鬼さんのポンチョを軽く握る。

「お待たせ。」

コウモリと母に見送られ、二者は家を後にした。

白い日傘と帽子の背丈や格好がアンバランスで、母は一人クスクスと笑った。

タンタン

弟は家を出てから吸血鬼さんに頼らず、一本の杖を使って歩く。

通る道の先をずっと同じリズムで左右に動かし、コンクリートの段差も難なく上る。

杖を使い慣れた手付きで石ころを退かす。

これらを続けながら隣の吸血鬼さんと会話をしている。

車や自転車などが通る場合、先ず吸血鬼さんが立ち止まり、弟が怪我しないようゆっくり引き止めながら端に寄せ、通り過ぎたら再び歩き出す。

それを繰り返しながら散歩コースを並んで進む。

そんな二者の会話は弟が質問して吸血鬼さんが答えるかたちが殆ど。たまに弟が昨日の出来事や本の内容を喋る。

それに相槌を打ちながら耳を傾ける吸血鬼さん。

そうこうしている内に近所の公園にたどり着いた。

此処は休憩ポイントの一つ。

友達と遊びながらはしゃぐ子供達の声に弟の顔が緩む。

目を閉じてはいるが、この光景が瞼の裏で流れているのだろう。

ボールを追いかける少年。

滑り台を笑顔で滑る女の子。

ブランコで競う子供達。

縄跳びや鉄棒で練習する小学生。

それらをベンチで温かく見守る親。

弟の想像の世界が同じなのか違うのか、それは誰にもわからない。もし全く違ったとしても、それが平和なモノであれば良いと思う。弟が顔を横に向ける。

「吸血鬼さん、一休みしよつか。」

「そうするか。」

柵や低い段差に弟が躓かないよう注意しながら先に入る。

ポンチョを握らせながらゆっくりと歩き、入口近くのベッドに腰を下ろす。

先に弟が手で位置を確認しながら座り、吸血鬼さんは砂などを払った後に浅く腰掛ける。

公園の平和でのんびりとした居心地の良い空間に暫く浸る。

会話らしい会話もせず、縁側で日向ぼっこをするようにぼーっとしているだけ。

吸血鬼さんも日傘を腕で固定してうたた寝をし始めた。

顔さえ日光に当たらなければ問題ない。

それに、普段昼間は熟睡しているから余計眠たい。

人間とは違う昼夜逆転生活の吸血鬼。

それでも弟の頼みを断れないのは哀れみからか気まぐれか。

吸血鬼さん自身よくわからない。

わからなくても構わない。

取り敢えず寝たい。

その隣で弟は肩掛け鞆の中のコウモリに今気付いた。

飲み物を飲もうとして手をつ込んだ感触でわかったのだ。

ザリ

手で太陽の方角を確認する弟に近付く一つの影。

吸血鬼さんよりは低いが歳の割には大きい方。

精悍な顔つきだが目付きが鋭い。

真ん中分けの髪はコスモスのような紫色。

横髪が耳にかかり、後ろ髪は首筋に当たる長さ。

黒い瞳と眉は黒くアジア系であると確証付ける。

耳に穴を空けておらず、服もタンクトップの上に襟付きの物を羽織っているだけ。

髪の色以外はまともな青年だ。

そんな青年はこんな身長だが今年十六歳。

高校生である。

何となく位置を認識した弟は太陽に背を向け、なるべく鞆を開けずにペットボトルを取り出す。

一方、危機に晒されているとは露知らず主と同じように熟睡しているコウモリ。

誤って飛び出す可能性は低い。

しかし隣の者が寝ているのにも気付かない弟は内心ヒヤヒヤ。

冷や汗を流しながらキツチリ隙間無く鞆を閉じる。

「オイ坊主、何コソコソしてんだよ。」

「あ、不良君だ。ヤッホー。」

ジーパンのポケットに手をつ突っ込んで弟の横に立つ青年。

表情一つ変えずに弟を見下ろしている。

弟は『不良君』と呼んでいるようだ。

二人は知り合いらしい。

声のした方に顔を上げ手を振るが、ペットボトルに肘が当たり落としてしまった。

地面を転がるペットボトル。

吸血鬼さんはまだ寝ている。

杖で探すが中々見つからない。

「あちゃー、やっちゃった。不良君取ってくれないかな？」

「しゃーねえな。ほらよ。」

砂を払ってから手の平に掴みやすいよう乗せてくれる。

口は悪いが根は優しい人なのかもしれない。

「ありがとう。」

「…別に。」

ペットボトルを両手で持ち笑顔でお礼を口にする。

それに不良君は何故か恥ずかしそうに頬を染め、ポリポリと頬を掻く。

言われ慣れていないようだ。

ペットボトルのキャップを開けようと両手を使ってキャップのギザギザを探す。

見つけたはいいが固く絞められており中々回せない。

力一杯やって中味をぶちまけるといふ事故を未然に防ごうと考えているから余計時間がかかる。

それを見かねた不良君が弟の手からペットボトルを取った。

簡単にキャップを回して溢さないよう手の角度を調節してやる不良君。

案外世話焼きなのかもしれない。

「ほら、飲め。」

「ありがとう不良君。助かるよ。」

「…礼を言われるような事はしてねえ。」

顔を逸らして呟く不良君の顔は赤い。

腕で口を隠す。

不良君の状態を知らぬ弟はゴクゴクと飲み物を飲む。

飲み終えたのでキャップを絞めようとするが、それに気付いた不良君が先に動く。

キュ

開けやすいよう少し緩めに絞められたキャップ。

鞆の中にまで入れてくれた。

勿論コウモリは無事である。

吸血鬼さんは動かない。

立ちっぱなしの不良君に弟は空いている左の箇所をポンポンと叩く。

「もし暇だったらお隣どーぞ。狭かったら言ってね?」

「…仕方ねーな。坊主が退屈そーだから俺が話し相手になってやるよ。」

「やったー。」

ストン

ベンチの端を文句言わずに背を丸めて腰掛ける。

背に弟の腕が当たるがお互い気にしない。

逆に不良君の背中 of 広さを確認するように左手でペチペチと触り始めた。

何となく吸血鬼さんが眠っているのに弟は気付いた。

静かな寝息が隣から聞こえる。

不良君は足を組んで顔だけ弟に向ける。

触られても叩かれてもされるがまま。

弟の好きにさせている。

「不良君の大きいね。吸血鬼さんよりもガツシリしてる。前より身長伸びた？」

「多少な。」

「成長期って遅しい。これからもどんどん伸びるのかあ。ちょっと羨ましい。」

己は諦めたような内容だが嬉しそうな口振り。

年下の子供の成長を素直に喜んでいるのだ。

口数が少ない不良君は肘を膝に置いて、両手の指先を絡ませる。

弟の奥にいる吸血鬼さんに視線を向けるが未だ起きる気配はない。連れがそんなので大丈夫かと心配になった。

一方、不良君の背中に満足した弟は手を離すかと思いきや、丸まった背中に乗せたまま。

指先で文字を書いたりして遊ぶ。

小中学生やイチヤイチャラブラブカップルがする行為だ。

内心そう思いながらも遊び相手になってやる。

背中 of 中心をなぞる指先の順番で文字を想像し答える。

しかし中々当たらない。

「ドラえもん。」

「ブー。」

「ドラ○ンズ。」

「ハズレー。」

「どら焼き。」

「違うよー。」

「……？」

頬杖をついて考える。

弟はずっと同じ単語を書いている。

こうというのが苦手なのか何十回も答えているが正解数はゼロ。

眉間に皺を寄せて真剣に悩む不良君。

遊んでいる子供が涙目になって逃げ出す程度の恐さ。

書いている単語は五文字。

ヒントは生き物。

最大ヒントは“吸血鬼^{キュウケツキ}”。

読者様はもうお分かりだろう。

弟の隣で昼寝をしている者のことです。

：しかし、一向に進展しない現状。

数えきれないほど外れてイライラしてくる不良君と、飽きも呆れも

せず延々と書いてやる弟。

もう正解を教えてやれば良いのに。

だが、そうすると不良君のプライドが許さない。

年甲斐もなく拗ねてしまうからだ。

それから二人はヒントをちょこちょこ出しながら続けた。

もう大分日が傾いてきた夕方。

手を繋いで帰る親子が次々と公園を後にする。

子供達はお互いに手を振り合い、元気に明日の約束を交わす。

親に今日の事を話ながら子供のペースで帰路を歩く。

微笑ましい光景を不良君は目で追った。

カアカア

電線の上に烏が集まり二人の行為を馬鹿にするように鳴く。

黒い全身を前後に揺する行為はまるで人間が指差して嘲るのと同じ。

「ドラ○ちゃん」

「だから五文字だって。」

「ああ？他に何があんだよ。」

「ドラ○○。四文字目は小文字。」

キレる不良君をポンポンと宥めながらゆつつくり書いてやる。

貧乏揺すりの代わりに膝をトントントンと人差し指で叩いて唇を尖らせる不良君。

流石に百回も越えれば弟も疲れてきた。

子供でもわかりやすいように一文字を大きく。

昼間に比べて公園には片手で数えられるくらいしか人が残っていない。

バサッ

弟の背後でポンチョを翻す音が周りに響いた。

振り返る二人の先には夕暮れを眩しそうに眺める吸血鬼さんが立っていた。

すると、鞆の中にいた筈のコウモリが器用に抜け出し、羽音をたてて吸血鬼さんの周りを飛ぶ。

いつの間にか白い日傘を畳み、ベッドに立て掛ける。

ゴウッ！

突然強風が公園を吹き抜けた。

その時、夕焼け色に染まった髪が舞い踊るように靡く。

青白い肌が刹那、人間と同じ肌色に変わった。

「……っ。」

弟の帽子が飛ばないように手で抑えていた不良君は一部始終を見つめていた。

いや、目が離せなかった。

ゴクリと息を飲む。

生唾が乾いた喉を流れる。

夢物語の住民のように美しいその姿に視界を全て奪われた。

薄く開いた唇が喉と同じようにカラカラに乾く。

チラと顔を此方に向けた吸血鬼さんの肌は元の色に戻っていた。

見下ろす男と視線が交わり、不覚にもドキッとしてしまう。

吸血鬼さんと不良君はまだ数回しか会っていない。

慣れないその容姿と雰囲気にはバツとあからさまに顔を背けた。

バタバタともかく弟にも気付かない。

「君、そろそろ腕を離してやれ。弟の首がもげる。」

「わ、悪い坊主。大丈夫か？」

「ビックリしたけど平気。けど、本当に首が取られるかと思った。」

頭をギリギリと締め付けていた腕を解放し、オロオロと慌てながら

弟の様子を伺う。

吸血鬼さんは立ったまま弟の帽子の上に手を置き雑に撫でる。

そのせいで弟の髪がボサボサになってしまった。

前髪が長いからちよつとしたホラー。

帽子を外して手で髪形を直す不良君。

恐る恐る痛めてしまった首を労る。

「もう大丈夫だよ。ありがとう。」

「放っておくと悪化するかもしれない。帰ったら冷やせよ。」

「酷い損傷はしていない。気に病むな。」

「あんたが怪我したんじゃないやねえだろ。人間はちよつとの損傷で死ぬ

時もあんだよ。」

ギン！

鋭い眼光で睨む。

烏が何羽か逃げ出すほど迫力がある。

が、吸血鬼さんは何処吹く風。

何もなかったように懷中時計を確認。

もうすぐ十七時。

そろそろ公園を出なければならぬ。

けれど吸血鬼さんは何も言わなかった。

弟が『帰ろう』と言い出すまで散歩に付き合う。

夜道は昼間よりも危ない。

夜の散歩の時は絶対誰かに同行してもらわないと、弟は行かせてもらえない。

それほど危険なのだ。

万が一、ライトを点けていない車に誤って轢かれる可能性がある。

耳や杖に全神経を集中させて歩く弟が、クラクション無しに危険を知るのは難しい。

強盗や通り魔に遭遇しても気配だけでは無理。

抵抗したとしても相手の場所がわからなければ意味がない。

しかも、弟は晴眼者のように安々と走れない。

人氣が少なければ助けも呼べない。

だからこそ、日頃から安全な道を通るよう心がけなくてはならない。

一人ではポツクリ逝ってしまうから。

死体しか残らないから。

最期は灰になって墓に入れられるだけだから。

ちゃんと自覚しているから、恐い思いをするのはよくわかっているから。

だから、弟は“自分が可能なことは自ら進んでやる”と決めている。周りに、誰かに縋りっぱなしで生きてると、もし誰もいなくなった時に自分のはたれ死ぬしなくなるから。

何か自分で出来ることを見つけないと、将来大変だから。

家族に頼りっぱなしは不可能だから。

同年代の普通の人と同じラインに立っていないから、何倍も努力してやっと自分は肩を並べられるようになる。

頭で理解しているから、弟はこう言う。

『俺は意地っ張りで負けず嫌いだから“可哀想”で手を貸してほしくないんだ。だから、俺が頼んだ時しか手伝わないで。お願い。』
家族や身近な人達、吸血鬼さんに宣言している。

弟らしいと言えばそれで終わりだが、それを実行するのは自他共にやきもきする。

何度も何度も失敗して、色々やり方を自分なりに考えて、そうやって手に入れる弟。

見守る周りは手を差し伸べたくて、やってあげたくて堪らないのに手伝えない。

もどかしくてイライラする気持ちを抑えて、弟が成功した時には一緒に喜ぶ。

家族もこれまで沢山の苦労を重ねた。

それが今に繋がっているのだ。

弟は家族にとっても感謝している。

ヒュウウ

風が涼しくなった。

弟は杖をしっかりと握り、ベンチに手をついて立ち上がる。

タンタンタンと地面を叩いて確認。

靴で踏んだりして足場の安全を注意。

それからキョロキョロと顔を左右に動かす。

何処にいるかわからない吸血鬼さんに大きな声で呼びかける。

「吸血鬼さん、そろそろ帰るよー？もっかい寝てないよねー？此処に置いてっちゃんよー？」

「おい。」

パコーン

背後に立っていた吸血鬼さんが弟の後頭部を叩く。

容赦ない一撃。

前に倒れる体。

腕を広げて受け止める準備をする不良君。

ザリ

何とか踏ん張り耐えた弟。

両手を杖の上に重ねて体重をかけ、下の手がズレてもガシッと握って持ちこたえた。

スタンバイしていた不良君にあと少しで頭突き寸前。

ギリギリだ。

帽子を鞆の中にしまったのが良かった。

被ったままだと帽子の鍔が直撃して不良君が痛かったと予想。

ガバ！

勢いよく上半身を起こして後ろに抗議する。

「もう、盲人を手荒に扱わないでよ。ギリだったじゃん。」

弟はムスと口をへの字に曲げて文句を言う。

グラッ

だが、勢いが良過ぎて今度は後ろに倒れそうに。

今度は支え無し。

杖は両手の中にあり、時間を止めれる超能力がない限り使い物にならない。

だが、弟の隣に移動していた吸血鬼さんが片腕で一回り小さい背中を抱き止めた。

子供のように軽くはないはずだが、吸血鬼さんは顔色一つ変えず弟をしっかりと両足で立たせる。

結果、弟は無傷。

杖を持つ手に杖を握らせ、最後にコツンと中指で軽く当てる。

「なら、障害者らしく大人しくすることだな。お前が怪我したら、暫く散歩に行けなくなるぞ。」

「吸血鬼さんありがと。」

えー、それは嫌だよ。歩かないと足腰弱るじゃん。不良君にも会えなくなるし。」

肩にとまったコウモリに頬擦りをしながら不満を口にする。

人差し指で不良君がいそうな場所を指して存在を強調する。

話の内容にまさか自分が加わるとは思ってもなかった不良君。

嬉しさと恥ずかしさとその他もろもろが入り交じって、取り敢えず顔を赤くして怒鳴り付ける。

耳まで熱がこもり湯気があがりそう。

「べ、別にしょっちゅう会ってるわけじゃねーから俺は関係ねえし！自惚れんなバカ坊主！」

「だからこそじゃん。週に一、二回しかお話できないから大切なんだよ？わかってる？」

吸血鬼さんは勝手に現れるけどね。約束しないと昼間に訪問してくれないし。」

「月一の食事の為だ。他の奴に横取りされたらムカつくからな。

普段昼間は棺桶の中で眠っている。五個の目覚まし時計とコウモリのおかげで今日も無理矢理起きた。」

「まあ酷い。俺は傷ついたよ。吸血鬼さんにめっちゃ傷つけられたよ。シクシク。」

毎回お疲れ様です。」

わざと欠伸を漏らすと嘔泣きしていた弟がペコリと腰を折った。

けれど『昼寝していたじゃん』と詰め寄れば『さつさと帰るぞ』と先に行く。

はぐらかされたことに拗ねるかと思えばケラケラと声をあげて笑い、不良君に別れを告げてから追いかけた。

テンポの良いやり取りを不良君は未だに顔を赤くさせたまま傍観していた。

手を振る弟に小さく振り返す。

公園の入口で待っていた吸血鬼さんに気づいた弟。

わざと大きな溜め息をついて冗談混じりに何か言っている。

それに吸血鬼さんはフツと微笑み、弟の頬をギュムとつねる。

痛くないのかヘラヘラ笑っている。

肩を並べて驚見家に帰る二者を見送り、何故か居た堪れない気持ち

になった不良君も踵を返した。
早足でこの場から遠ざかる。
そして公園には鳥だけになった。

夜、弟の部屋に二者と姉がいた。

ベッドに腰掛けた吸血鬼さんの隣で、恍惚の状態を晒け出して熱い眼差しを向ける姉。

気にせず会話を楽しむ二者。

パジャマ姿の弟は晩御飯を食べ、お風呂にも入り、寝る準備は万全だが、まだ寝ない。

「吸血鬼さんって家族いるの？」

「人間と同じように我々にも家族がいる。」

我々の種族は一人前と認められた時点で家を出て自分の家を探さなくてはならない。己の立派な家庭をつくらない限り身内とは会えない。そういう決まりだ。」

「あたし人間で良かった！。弟がいなかったか人生の半分くらい失っちゃう。」

明るい声で無邪気な笑顔でギューと抱き締める姉の背中をポンポンと叩く。

背中に抱き着いてじゃれる姉を好きにさせて会話を続行。

「それって寂しいね。結婚するまで独りぼっちなんだろう？」

「家族や親戚などに自主的に会うのは禁じられているが、友がいるからそこまで孤独ではない。コウモリもいる。」

バササ

スツと左手を上げると一匹のコウモリが指先に留まる。

周りを飛び回るコウモリに若干逃げ腰の姉は、抱き締める力を更につよめた。

「ぐえ。姉ちゃんギブ、ギブギブ！」

ペシペシ

首を思いっきり締める腕を何度も叩いて解放を求める。

しかし昔、合気道をちよつとかじった腕はそう簡単に外れない。

まだ死にたくないから叩く手にも力がこもる。

姉は吸血鬼さんと自分（と弟）を取り囲む沢山のコウモリにパニック
っている。

ギュツと目を瞑り、顔を弟の背中に押しつける。

「コウモリ怖いコウモリ怖いコウモリ嫌コウモリ大量発生ヤダアア
アアアア！！！！」

数分後、気絶した弟を吸血鬼さんが救出。

『盲目の筈なのに綺麗な景色が見れたよ。』

後日、謝罪に部屋を訪れた姉に窓の外に顔を向けたまま、弟はそう
呟いたらしい。

吸血鬼さん??（後書き）

「何であの時直ぐに助けられなかったんだよ。見損なったわ吸血鬼さん！」

両手で顔を覆い隠し、嘘泣きを開始する。

前髪が長いから顔の上半分は見れないという固い鉄壁がある。

しかし、吸血鬼さんにはお見通し。

敢えて無視を決め込む。

「まだ体の疲れがとれてなく、昨晚は頭がぼーっとしていた。嘘と真実を混ぜた言い訳をする。」

だが、弟も成長している。

吸血鬼さんが嘘を言う時の癖を見破りビシッと指差した。

「貴方は嘘をつきましたね!？」

「何のことやら。」

「俺にはわかってるんだからね！」

「なら、お前の嘘泣きはどうなんだ？」

「何のことやらわかりません。」

互いにしらばっくれて顔を背けた。

シーン

暫く沈黙が流れる。

コウモリも全く動かない。

遠くで犬の遠吠えが聞こえる。

最近よく鳴いている。

「フツ。」

沈黙に耐えかねた弟が拳を手に当てて笑う。

それを合図にコウモリも羽を広げたりとリラックスする。

「お前の負けだな。」

「そういうことにしてあげよう。」

「減らず口め。」

「痛いなあもう。」

グイと強めに頭を押す吸血鬼さんの手首を掴んでもうさせないようにする。

したり顔を吸血鬼さんに向けるが、今回は耳を摘ままれた。爪で傷つけないよう親指と人差し指で引っ張る。

ガチャ

そんなやり取りをしていると姉が登場。

嫌な予感がする二者。

弟の背中に冷や汗が流れる。

予想は的中。

姉は目にした百匹程度のコウモリに耳鳴りがするほど悲鳴をあげ、慌てて隣の部屋に駆け込んだ。

姉が見えた瞬間に耳を塞ぎ、一部始終を呆れた眼差しで観ていた吸血鬼さん。

一方、弟は水色のポンチョの中に頭を突っ込み、昨夜のように一方的に巻き込まれないよう、吸血鬼さんに抱き着いて離れない。

一つのトラウマが弟の心につくられてしまった。

透明人間さん（前書き）

「今から君達には最終試験を受けてもらう。これを合格すると一人前だ。」

学校で校長先生が真剣な表情で口にした。教卓の前には世界の裂目が渦巻いている。

結構デカイ。

何処に繋がっているのかわからないほど先は真つ暗だ。

前日に担任に言われていたから心の準備はしてある。

他の奴等もそうだ。

しっかりと頷いて決意を示す。

全員を見回した校長先生が最終試験の最終確認をする。

受からないと、もう二度とこの世界には帰れない。

「条件は簡単。」

これから人間界に行き、目を見詰められながら名前を呼ばれる。無論、『名前を呼んで』と言ったら即失格。上手く言い換えて呼んでもらうこと。期限は無い。合格すると世界の裂目が開くから、そこから帰って来なさい。

質問はあるか？」

長い髭を触りながら私達を見渡す校長先生。

教室の入口に立つ担任は不安の色を隠せない。

爪を噛んで気を紛らせている。

校長先生の顔色も優れない。

心配する二人や緊張している仲間を他所に、私は夢の実現を目前に興奮していた。

最終試験合格もあるが、もう一つの野望があるんだ。

人間界で、私は友達をつくりたい。

たった一人でもいい。

出来ればその友達に名前を呼ばれたい。

私はやるんだ。

夢は実現してこそ意味を成す。

「では、始め！」

校長先生の掛け声を合図に、私達は渦の中に飛び込んだ。

透明人間さん

人間界にやって来た。

最終試験をクリアする為に。

私は透明人間。

人や物に触れない、空気のような存在。

人間はそう思っている。

：しかし、本当は違う。

触れるんだ。

話せるんだ。

成人だと認められれば、何にでも触れる。

存在を認めてもらえる。

人の輪の中に、無条件で入れるんだ。

だから、この最終試験に受からないとならない。

成功しなければ、人間界を永遠に放浪しなくてはならない。

一生孤独だ。

そうならないように、成人と認定されるように、私はやる。

家族と再会する為に。

人間界で“友達”を作るために。

そう決意して、世界の裂目に飛び込んだんだ。

最終試験を受けた仲間が少ない。

透明人間自体、他の奴らと比べて人口が少ない方だからだ。

一番多いのはやっぱり吸血鬼ドラキュラだな。

澄ました顔がム力つくけど、勢力が一番だ。

思い出すのは止そう。

イライラするだけだから。

今は試験に集中しないと。

私の仲間はバラバラに飛ばされたようだ。

透明人間同士なら存在が把握出来るけど、辺りを見回してもそういうのは見当たらない。

ザワザワ…

此処が私の試験場所。

人間が沢山いる。

こうというのが都会か。

よし、やるぞ。

手始めに、前方からやって来る男性に声をかけてみる。

「あの、」

「…。」

無視された。

次は女性に話しかける。

が、前と同じ。

街を歩いても誰にも気づかれない。

肩が当たってもそこだけ通り抜けて、ぶつかった人間はその事を知らずに歩いて行ってしまう。

動物もそうだ。

猫以外は触ろうとしても触れない。

手がすり抜けてしまうだけ。

猫は魔女の遣い者が紛れてるから気づいてはもらえる。

でも、触れない。

それから手当たり次第に話し掛けた。

目についた人間は片っ端に喋りかけた。

けれど、不思議に思われるだけで、空耳と勘違いされて終わり。

振り返る人はいない。

靈感が強い子供にも無視される。

いや、透明人間に靈感が関係してるのかはわからないけど。

それくらい必死に喋りかけた。

…だが、誰一人として私を知る存在は現れなかった。

視界が涙でボヤけてきた。

迷子になった子供のようにボロボロと大粒の涙が溢れて止まらない。
ドクンッ！！

強い孤独感が全身に押し寄せる。

今まで感じたことのない恐怖。

まるで此処にいる奴ら全員に押し潰されてしまいそうな恐さ。

みんながみんな、私を空気のように扱っている錯覚に襲われる。

もう、色々限界。

立っているのも厳しくて、スタンとその場に座り込んでしまった。

ガタガタと手や足が尋常じゃない震えて止まらない。

助けてほしい。

しかし、無情にも人間は私をすり抜けて先を急ぐ。

…本当は此処にいるんだ。

寂しい。

悲しい。

夏なのに寒い。

誰か気づいてくれよ。

わかってくれよ。

頼むから。

後生だ。

たった一人で構わないから。

一回だけで良いんだ。

「誰か…っ、」

私の名前を呼んで！

口にする事を許されない願望が喉まで出る。

身体を強く抱き締めて、キュッと下唇を噛み締める。

自分の存在が人の波に消えてしまわぬよう、もっと、もっと、腕が

痛くなるまで己を掻き抱く。

一向に存在を気づいてもらえない虚しさ、声をかける無意味さなどに

涙が流れた。

学校のやり方を実践したいのに人間は早すぎる。

目を合わせられない。

これさえやれば、触れるはずなのに。

クソ、クソ……ッ！

ダン！

コンクリートの地面を叩いても手が痛いだけだった。

嘆いていても何も始まらない。

冷静になった私は腕で涙を振り払い立ち上がった。

可能性は必ずある。

きつと、絶対、確実に。

場所を変えよう。

気配でわかってくれる人間が必ずいる。

地球は広いんだ。

場所を移動してはいけない、という条件は無い。

問題ない筈だ。

思い立ったらすぐ行動。

人を避けることなく全速力で駆け出した。

「……疲れた。」

色んな所を歩き回った。

時には走ったりしたけど、結果はゼロ。

カフェで喋っているオバサンを狙ってみた。

が、顔がひっきりなしに動いたり、目を閉じて爆笑して中々止まってくれない。

一人必死に視線を合わせようと体を動かした。

しかし、成果は得ず。
首と腰を痛めただけ。
無駄骨だった。

だが、諦めない。

次は老人に絞つてみた。

この人達は動きが遅い。

目線を一分間交える何て簡単だろう。

安直な考えだが、これが上手くいった。

痛む腰に鞭を打って、ずっと顔を見上げながら眼鏡のお婆さんを見
詰めていた。

キツかった。

「へっ？」

「あ、どうもこんにちは。」

驚いた顔のお婆さん。

やっと気づいてくれる人間に出会えた。

…そう思っていたのに。

「イギヤアーーーーッッッ！！！」

キーン

何処からそんな声を出せたのか詳しく教えてもらいたいほどの絶叫。

ポ口とお婆さんの口から入れ歯が落ちた。

私も驚いてガンと後頭部を打ってしまふ。

ズキズキと鈍く痛む。

突然目の前に現れた私にお婆さんは気絶してしまった。

周りの人がどよめく。

今ならお婆さんに触れるけれど、それをするとなりの人ばかりには
お婆さんが空中に浮くという奇怪現象になってしまふ。

「ごめんなさい。」

白目を剥いて気絶するお婆さんに深々と頭を下げ、その場を逃げ出
した。

ま、まだやれるぞ。

次は店員だ。

コンビニで暇そうにしているお兄さんがターゲット。

レジの奥でぼーっとしているお兄さんをジーツと見つめること二分。

あ、うたた寝し始めやがった。

バカヤロウ。

目を閉じてたら意味ないじゃないか。

開ける。

薄目でいいから開けて。

お兄さーん。

お兄さあん？

起きてよー。

お前、一応仕事中だろ。

あ、敵ついオッサン来た。

パーン！

頭からいい音が鳴って、横を向くと敵ついオッサン。

怒ってらっしやる。

サアーと真っ青になるお兄さん。

首根っこ掴まれてズルズルと奥の部屋に引きずられた。

巻き込まれたくないな。

よし、諦めよう。

動くドアをすり抜けてコンビニを後にした。

それから色んな年代を狙ったが、怖がられたり、逃げられたり、時には殴られたりと散々。

節々が痛い。

顔が特に痛む。

親にも殴られたことないのに。

あ、公園がある。

そういえば立ちっぱなしだったな。

「一休みしよう。」

透明人間にも休憩は必要です。

子供がはしゃぐ何処にでもありそうな公園。

ベンチ空いてるかな。

周りを見渡すと殆どが女性に占領されている。

この子供達の母親だろうか。

沢山いるな。

透明人間だからお互い気にする必要はないけど、私が遠慮したい。

気まづくなるし。

うーん、空いてないかな。

あ、一脚だけ一人で座ってる。

帽子を被ってる中学生くらいの男の子。

前髪がやけに長いな。

あれじゃ前が見えないだろう。

黒い髪が肩につく長さで、遠目で頭だけだったら女の子に見えなく

もない。

日向ぼっこしているのか一人でぼーっとしてる。

老人みたいだ。

まるで平和を味わってるみたい。

よし、お隣にお邪魔しよう。

地べたに座るの嫌だし。

子供に先越されたら公園の柵に腰掛けるか。

腰をトントンと叩きながら、入口に一番近いベンチに向かって歩き

出した。

近くに来たはいいが、やっぱり気づかれない。

その悲しみにも漸く慣れた。

…やっぱり傷つくけど仕方ない。

ベンチに白くて長い棒みたいなのが立て掛けてあるけど、彼のだらうか。

変わった棒だな。

そんなことより先ずは一休み一休み。
一応隣に座るのを断っておこうかな。
無視されるのは目に見えてるけど。

「お隣失礼します。」

「あ、どうぞどうぞ。スペースありますか？」

「！？」

ガタッ

い、今！

返事した！？

私の言葉に！？

今まで無反応だったのに！？

え、実は気配で気づいてたけど無視してたの！！？

それちよつと、いや大分寂しい。

…けど、めっちゃめっちゃ嬉しい。

諦めながら呟いた言葉に反応してくれる日常を取り戻せた気分。

結局地面に座ったけど、このまま嬉し泣きしてしまおう。

やっと出会えた。

会話できる人間に。

「あの、大丈夫ですか？コケた音が聞こえたけど。後、もしや泣いてる？」

「いや、誰かと喋ったの久しぶりなんで、つい。お構い無く。」

男の子が私の方に顔を向けて小首を傾げる。

ウザがられないよう慌てて涙を拭い、砂を払ってから右隣に座る。

顔がニヤけてしまうのは仕方ない。

嬉しいなー。

えへへ。

怖がられないのって何時ぶりだろ。

そんなのどーでもいいっか。

隣でござこそと肩掛け鞆を漁る男の子。

どうしたのだろうか。

「これ、まだ使っていないからどうぞ。
後、この時間帯には此处にいるんで、話し相手くらいにはなれますよ。」

「あ、ありがとう。優しいんですね。」

差し出されたハンドタオル。

受け取ろうとそれを掴もうとするが、出来なかった。

透明な手がタオルを透かし、人間界に来て初めての好意を受け取れない。

また涙がじわりと滲む。

どうしよう。

「どうしたの？」

「見ての通り、私、透明人間なんです。だから、その、とても嬉しいんですが、触れません。ごめんなさい。」

膝の上で拳を固く握り締める。

見えない私に優しくしてくれたのに。

ハンドタオルさえも触れない自分が悔しい。

ごめんなさい。

そして、ありがとう。

凄く嬉しかったです。

俯いている私の隣でタオルをしまいながら男の子が喋る。

「へえー、透明人間だったんだ。そうとは知らずに、何かごめんね。」

「

…え？私の体、見えないでしょ？何もないだろ？」

両手を大きく広げてアピールしてみる。

目の前で手を振っても男の子は気づいてない。

すると、何か思い出したように話し出した。

まるで、昨夜の晩御飯を思い出したノリで。

「ああ、言っただけだったね。俺、元々何も見えない“盲人”なんだ。僅かな光と暗がりの判別しか出来ない。ぶっちゃけ、声掛けられな

きや気づかなかった。」

「ご、ごめん。私の方こそ、そうとは知らずに…ごめん。」
「気を遣わないで。」

じゃあ、ここはお互い様ってことで解決。」

深々と頭を下げる私に明るく話す男の子は、全く気にしていない様子だった。

パン、と手を叩いて笑う。

おおらかな子だな。

ちよつと尊敬。

じゃあ、一分間見詰めても意味ないかな。

いや、可能性はあるかもしれない。

一か八かやってみよう。

上半身を横に向けて、口だけ微笑する男の子に拳手をした。

「実は、触れるかもしれない方法があるんだけど、やってみない？」

「俺にもできる？」

「一分間見詰め合うただけだから簡単だ！」

「盲人だけど、一応やってみようか。暇だしね。」

意気込む私の熱意を感じたのか、被っていた帽子を外して前髪を手でわける。

露になった顔は良くも悪くもなく、普通の顔だった。

閉じていた瞳が開かれる。

あ、周りの人と違う。

そう思った。

だって、視線が全く定まらない。

上下左右に忙しなく動く眼球。

無理かも。

…いや、諦めるのはまだ早い。
スッ

男の子の顔を包み込む。

触れないけど、何となく。

こうしてやりたい気分。

「真っ直ぐ見てられる？」

「頑張ってみる。」

日焼けしていない顔が近い。

もし成功したら、気まずい。

恥ずかしくて死ねるかも。

一分後、奇跡は起きた。

男の子の肌の感触が手に感じる。

神様がオマケしてくれたのだろうか。

頬をムニと摘まめる。

…感動。

また嬉し泣きしてしまった。

目頭熱い。

ポタポタと膝の上に落ちる涙。

「何事もやってみるもんだ。

これで君の涙が拭ける。」

「うゝゝゝゝ。」

「涙脆いね。よしよし。」

恐る恐る伸ばされた右手が温かい。

そっと涙を掬ってくれる。

曲げた人差し指に涙が溢れて零れる。

目に指が入らないように気をつけてくれるのがわかる。

彼は本当に優しい。

その温もりが寂しかった心を癒してくれる。

幸せな一日だ。

ザリッ

いつの間にか近くに人が立っていた。

顔を上げてどんな人か伺う。

が、物凄く後悔した。

紫色の頭に蔽つい顔の青年。
めっちゃ睨んでる。

恐い。

逃げたくなるくらい怖い。

硬直した私を他所に、彼は顔を上げて青年に声をかけた。

ああ、なんて命知らずなんだろう。

逃げても良いですか？

「こんにちは不良君。学校帰り？」

「よう坊主。今日はバイトが入ってねえから来てやった。坊主は一人で何してんだ？」

あれ？

お知り合いですか？

とても親しげに会話していらつしやると思うのは私だけ？

「透明人間さんとお話中。一分間見詰め合つと透明人間さんが見れるんだよ。しかも触れる。」

不良君もやってみて。そこで、俺に容姿を教えて。」

「吸血鬼の次は透明人間か。坊主の周りは変わってんな。その透明人間はそこにいるのか？」

トントン拍子に話が進む。

あれ、これは見詰め合わなきゃいけないフラグ？
この強面の青年と？

私に死ねと？

チラッと青年の方を盗み見ると、ガン見してた。

恐っ！！

心臓が一瞬止まったし！

いや、透明人間にも心臓はありますからね！

失礼な！

……もう、これは腹をくくるしかないな。
目が見える人の方がいいし。

試験クリアの為。

試験合格の為。

「じゃあ、暫く動かないでくださいね。」

「うわ、喋った。本当にいるんだな。」

「疑うなんて酷いなあ。」

素直に驚く青年。

慣れはしたけど、やっぱりグサツてくるな。

隣で拘ねる男の子を無視して見詰め合う。

一分経過。

すると、青年の反応が変わる。

「スゲー、マジで透明人間だ。ちょいホラーだけど。」

「私の意思で特定の人だけ見えなくさせたり出来ますよ。ほら。」

念じてみせると青年が驚愕の表情で辺りを見回す。

姿を消したのだ。

また同じ用途で念じると視線が合う。

一回すれば後は自由。

見えなくさせたり、触れなくさせたり、認識してほしければ姿を現

せばいい。

声だけはずっとこのままだけど。

「マジか。透明人間って初めてだけど感動すら覚えるわ。」

「ありがとうございます。」

率直な感想にちよつと照れる。

そんなに褒めなくてもいいのに。

顔が赤くなるのがわかる。

ペタペタ

ベンチを軽く叩く音がする。

男の子が何かを探すように前屈みでベンチを擦っていた。

一体何をしているのだろっ。

無くした物は特に思い当たらないけど。

よくわからずにいると、何かに気づいた青年が動いた。

「ちょっとアンタ退いてくれ。」

「は、はい。」

私を端に退けると青年はベンチの裏に手を伸ばして何かを拾った。パンパンと砂を払ってやり、まだ一生懸命探している男の子の頭に被せる。

帽子の上にポンと片手を置き、フツと微笑んだ。

この時の青年の笑みは、今まで見てきた中で特に優しいものだと感じた。

探し物が見つかったのか男の子は二ヘラと頬を緩める。

喜んでいるのがよくわかる。

「ありがとう。帽子がなくて焦ってたんだ。」

「どうせ風で落ちたんだろ。今度からはちゃんと握っとけ。」

「不良君がいない時はそうしよっかなー。」

「……つたく、調子に乗るな。」

ペチン

男の子の額を軽く平手打ち。

音で痛くないのがわかる。

叩かれたのにケラケラ笑う男の子。

じやれるように青年の腕を引っ張る。

苦笑しながらも相手をしてやる青年も楽しそうだ。

手加減しながら遊んでいる。

男の子の方も限度をわきまえながら手を出している。

青年の方が一枚上手のようだ。

私は二人の邪魔にならないよう姿を消して見守った。

これが“友達”か。

羨ましいな。

楽しそうだな。

いいな、友達。

私も交ざりたい。

でも、駄目だよな。

：よし、そろそろお別れしなくちゃ。

試験を終わらせないと。

ツンツン

注意を引くよう青年の肩をつつく。

「ん？なんだ？」

案の定振り返ってくれた。

膝の上に男の子を乗せて脇腹を擦る手を止めない。

男の子はずっと大笑いして悶えている。

ヒーヒー言って膝をバシバシ叩いて抵抗してる。

青年に近づいた。

この恐い顔に慣れてきたな。

自分の目を指差して青年にお願いする。

これが最終試験。

「私の目を見て、今から言う言葉を繰り返してくれない？」

人間に見詰められながら名前を呼ばれること。

短い間だったけど、二人共ありがとう。

唇を動かした。

涙が頬をつたう。

最後には綺麗に笑って、ちゃんと『バイバイ』言えるかな。

透明人間さん（後書き）

あれから数日後。

学校で卒業証書を貰った私は急いで仕度をしていた。
旅行鞆に荷物を詰め込んで忘れ物を確認する。

後ろで家族が心配そうに見守る中、私は高揚していた。
また二人に会えるんだ。

人間の友達に。

先ず、再会したら名前を聞こう。
そして居候させてもらおう。

食事は基本的に空気だから、きっと問題ない。

無理矢理にでも居座ってやろう。

お土産はどうしよう。

家族に頼んでおくか。

もし人間界で何かあっても家に帰れる距離だし。

大丈夫大丈夫。

頬がゆるゆるなのは仕方ない。

青年と男の子、ちゃんと覚えててくれるかなあ。

忘れてたら殴ろう。

「ふふっ、待ってるよー！」

グッと両手を突き上げて叫んだ。

気合い充分。

これから先の楽しい人生を夢見て、私は部屋を飛び出した。

再会した者（前書き）

夜中の弟の部屋。

家族が寝静まった家の電気は全て消されていた。

弟の部屋も月明かりしか頼れる光はない。

黒髪の弟は珍しく目を開いて、長い前髪をおろしたまま窓の外を眺めていた。

その隣には壁に凭れ、横顔を黙って見上げる吸血鬼ドラキュラさん。

片膝をたてた上に肘を乗せている。

「吸血鬼ってさ、みんな美人さんばかりなの？」

「私には美しいのかどうかはわからない。」

ただ、人間が我々の容姿を見て、声を聴いて、雰囲気にあたれば、我々に惹かれるようにはなっている。“一目惚れ”と同じ原理だ。」

「じゃ、俺には意味ないね。見えないもん。」

頭の上のコウモリを人差し指で撫でながらヘラヘラとした笑みを浮かべる。

まるで仲間外れにされて嬉しがるひねくれ者のように。

自分は関係ない、と高らかに笑うように。

指先に乗せたコウモリに鼻先を当て合う弟の表情に歪みはない。

「…私もそう思う。」

「何がー？」

「独り言だ。」

此方に顔を向ける弟の横腹にトンと頭を寄せ、心地よい心音を耳にスツと目を閉じた。

再会した者

枯草色の髪が人々をすり抜ける。

肩の辺りで緩く結んだ真つ直ぐな髪は、緩やかに流れる川のように腰まで伸ばしている。

靴紐をキツく絞めたスニーカーが一步進む度に、その髪が日光を浴びてサラサラとまるで金糸のように光る。

肌は泉の水のように透き通り、一瞬でも目を離せば消えてしまいそうなほど。

決意を秘めた凜々しい顔にはまだ年相応のあどけなさが残っている。襟のある七分丈の服の胸ポケットに、お守りとして渡されたネクタイピンが刺してある。

胸には女性特有の膨らみがあり、胸を張って歩いているから余計強調される。

色々な物を詰め込んだ大きな旅行鞆を片手で運び、ズンズンと早足で人を避けることなく前進あるのみ。

人混みの中でもスピードを緩めない。

そんなことが出来ないと思われるが、彼女は人にも電柱にも全くぶつからない。

人にぶつかる瞬間、彼女の体は何もしていないのにヌウと人の体を通り抜ける。

前方からやって来たサラリーマンの胸の中に彼女の頭が入り、一秒も経たない内にサラリーマンの背中に移動している。

全身もそれと同様で、最後に足がサラリーマンの踵を抜ける。そして二人の距離が広がっていく。

サラリーマンは気づいていない。

体を通り抜けられたことも、彼女の容姿も、彼女の存在さえも。他の人達もそうだ。

彼女がそこにいたということを知らない。

いや、わからない。

彼女はやけに長いアスファルトの坂道を歩いていた。
目的地まで、後少し。

「よいしょ。」

鞆を持つ手が痺れてきたのか、反対の手に持ち替える。
何気ない掛け声。

すれ違った女の子が声に反応して振り返るが、そこには誰もいない。
「…幻聴？あ、ヤバい系だ。急がなきゃ！」
空耳だと思ふことにした。

ケータイを確認した女の子は顔を引き吊らせ、慌てて待ち合わせ場所を目指した。

一方、彼女は黙々と着実に坂道を上る。

長時間歩きっぱなしだが疲れた顔を見せない。

今日は日照りが強い。

彼女の足元に注目すると、人間なら必ずある筈のが“影”が無かった。

何処を探しても見当たらない。

それもそのはず。

彼女の正体は“透明人間”。

誰にも気づかれない、孤独な存在。

何も触れないし、声しか聞き取ってもらえない。

人々はそう認識しているが、実際は違う。

ある方法をすれば触れるようになるし、姿を認識してもらえる。

しかし、これが意外と難しい。

経験者が断言する。

俯いて歩く人間が多い地域なら尚更困難。

けれど、彼女はそれを成功させた。

だから今、この人間界にいる。

長い坂道を上りきると、場所が見えてくる。

後もう一踏ん張り。

「いるといいな。」

逸る気持ちを抑え、目的地である小さな公園を目指した。

今日も一人、弟は公園にいた。

家を出る前に母に手渡された折り畳み式の日傘をさして、何時ものようにぼーっとしている。

「ねえねえ驚見お兄ちゃん。」

「どうしたの？」

小学生の子供達が話し掛けてた。

たまに顔見知りの子供達がこうやって喋りかけてくれる。

勿論、苦手な不良君がいない時限定だが。

今日はバイトがあるのか不良君は公園にいない。

だから安心して弟に近づけた。

弟も声だけで子供の名前がわかるくらいには親しい。

しょっちゅうこの公園にいるのと、ご近所の噂などで、弟は意外と有名だったりする。

それに加え、二ヶ月くらい前から吸血鬼さんドラキュラと一緒にいる姿を度々目撃されている。

美人な吸血鬼さんはご近所の女性に人気があるが、高嶺の華なのかそっと思守られるだけ。

しかも、あの不良君と親しげにしているから、色々と噂は絶えない。だが、当の本人は興味ないのか、相変わらずのほほんとしている。子供の一人が弟の手を引っ張る。

「一緒にセミ取りしよーぜ。またあの技やって見せて。」

「えー、どうしよっかなあ。」

わざと考える仕種をする。

腕を組んで『うーん』と唸る。

子供達は弟を取り囲んでお願いし始めた。

中には弟の服を引っ張ったり、膝を叩いたりする子もいる。

「いーじゃんいーじゃん。」

「頼むよー。」

「あれやれるの驚見兄ちゃんだけなんだよ！」

子供達の熱意に負けた風に『ハアー』とわざとらしい溜め息を吐いて、帽子を被り直した。

人差し指だけを立てて、皆を見回すように顔を動かす。

此処にいる全員、弟が盲目なのを知っている。

ドキドキしながら見詰める期待を含んだ瞳。

ニツと歯を見せた弟に、子供達の顔がパツと明るいものになった。

「仕方ないなー。後でちゃんと逃してあげるんだよ？約束。」

「やった！」

「大収穫するぞー！」

「君達は本当に元気だなあ。俺はもう歳だから羨ましいよ。」

「驚見兄ちゃん何言ってんだよ。まだ二十歳前だろ。」

「あたしのパパよりも若いじゃない。しっかりしてよね。」

「アハハハ！それもそうか。そりゃ失礼しました。」

んじゃ、始めますか。」

ケラケラと楽しそうに笑う弟を見て、自然と子供達も笑顔になる。

ポンポンとベンチを叩いて愛用の白い杖を探すと、一番大人しい女の子が手渡してくれた。

その子の頭にポンと手を置き『ありがとう』とお礼を言えば、はにかみながらも嬉しそうに頷いた。

急かす周りを宥めながら立ち上がり、肩掛け鞆がずり落ちないように親指で掛け直す。

杖を持たない左手を三人に引っ張られ、背中を二人に押されながら公園の端に導かれる。

そこには木が立ち並ぶ数少ない日陰。

ミンミンミン

頭上から蝉の合唱。

弟の日傘を使う小さな女の子が『あ!』と指差す先にはアブラゼミ。すかさず男の子が虫取網片手に駆け出した。

一番大柄な男の子が弟を見上げる。

「驚見お兄ちゃん、何処にいる?」

「暫しお待ちを。」

スツと空を仰ぎ、じつと耳を澄ます。

神経を耳に集中させ、次の瞬間、ビシツとある方向を指差した。

「あっちの木にアブラゼミ三匹。その隣の木にはミンミンゼミ一匹。」

「よつしゃ行くぞ!」

「向こうにアブラゼミ三匹。一匹は高い所にいるから気をつけて。」

「わかった!」

次々と蝉の居場所を指示し、子供達が走り回る。

種類や何匹いるかまで言い当てる。

実際に弟が言った木に蝉がいて、数もちゃんと当たっている。

高さまでわかってしまうから子供達は興奮する。

日傘を使う女の子はずっと弟の隣でセミを捕まえる光景を眺める。

虫籠に集まるセミに男の子も女の子も目をキラキラ輝かせた。

「兄ちゃんもつと!」

「んー、あっちの電柱に二匹並んでいるよ。車に気をつけて取りに行きな。」

「あいよー!行くぜ!」

「待てよ!」

駆け出す男の子を筆頭にそろそろとついていく子供達。

ウズウズしていた女の子も弟に日傘を返し、小走りで追いかけた。

弟の周りには満足した子と疲れてへたりこむ子が残された。

みんな汗だくでへとへとだ。

虫籠には車のサイレンよりも喧しいほど蝉が入っている。

戻って来た子供達の顔はどれも満足そうに笑っていた。

子供達は最初の約束通り、虫籠の蝉を全部逃がしてやった。

一番年長の子の家に涼みに行くと言って弟と別れた。

最後に『ありがとう』と喜んでいた声に嬉しくなる。

手を振って見送ると子供達も振り返し続けた。

再びあのベンチに戻りボケーっとする。

一気に静かになった。

今日は特に日差しが強くて暑い。

空気がムワツとする。

弟の顎から汗が滴り落ちる。

タオルで拭いても止まらない。

水分補給するが、ペットボトルのお茶が温い。

冷たい飲み物が欲しくなる。

もう熱中症になりそうだ。

今日は早めに切り上げよう。

「帰ろうかな。」

杖を使って立ち上がり、そう呟いた時だった。

ザッ

砂を踏む音がした。

そこには先日、丁度此処で出会った透明人間さんが立っていた。

両手には大きな旅行鞆。

しかし、弟は誰だか気づいていない。

「不良君、じゃないね。足音が違う。」

先程の蝉の居場所を当てるように断言する弟。

ドサッ

透明人間さんは荷物を地面に置き、スッと両手で弟の手をとる。

その目は真剣そのもの。

ギュッと握る力がこもる。

体温や肌の感触でやっとな誰だか気づいた。

あの日、突然いなくなつた人。

「もしかして透明人間さん？」

「そうだ。あの時は黙って帰ってすまなかつた。準備とかで色々慌てていたの。」

「忙しかつたならしょうがないよ。気にしないで。」

けど、無事で何よりだ。元気だった？」

「お陰様で。君も変わらないな。」

深く問い詰めず、心配したことだけを話す弟に透明人間さんは顔を綻ばせた。

あの日、不良君は弟に『あの女は帰つた』とだけ伝えた。

別れ際に透明人間さんが流した涙や、ぐちゃぐちゃの笑顔は一切触れずに。

だから、弟は何も知らない。

だから、何も聞かない。

あの子が言いたくないのなら尚更。

無理強いする理由ヒツヨウはない。

ズイ

手を包んだまま体を近付ける透明人間さん。

真面目な顔に戻っている。

化粧一つしていない唇が若干早口になる。

焦っているのか、追い詰められているのか、雰囲気雰囲気で透明人間さんが切羽詰まっているのだけはわかつた。

杖を持った手で頬に触れる。

透明人間さんは切り出した。

「暫くの間、君の家に居候させてほしい。

私は人間界を色々知りたくて、君達以外の友達も沢山たくさんつくりたくて、再び人間界に訪れた。

一通り満足したらちゃんと家に帰る。迷惑はかけない。私達透明人間の食事は空気だから食費はかからない。私に出来ることは何でも

する。頼れるのは君と、あの厳つい顔の青年しかいないんだ。頼む！

ガバッ！

弟の手を離し、膝に手をつき深々と腰を折る。

目は固く閉じられ透明人間さんの決意が計れる。

突然離れた顔に驚いた弟は、近くにいるはずの存在を手探りで探す。頭を下げている透明人間さんはそれに気づいていない。

唇をキュッと結び返事を待つ。

いなくなってしまったのかと一人不安にかられる。

こういう事態が弟は一番恐い。

最初から一人なら構わないのだが、何も言わずにいなくなれると酷く心配してしまう。

見えないから余計に。

キョロキョロと左右に首を振り、じつと耳を澄ます。

が、風の音や車が走るエンジン音など、大きめなモノしか耳に入らない。

人が呼吸する微かなモノが聞こえない。

堪えきれなくなつて名前を呼んだ。

その声は僅かに震えていた。

「透明人間さん、まだいる？いたら返事してくれると嬉しい。」

「あ、君はそうだったな。すまない。不安にさせてしまった。」

頭を上げた先に立つ弟が、必死に自分を探しているのにやっと気づけた。

さ迷う手を透明人間さんが取り、弟は確かめるようにギュッと握り返した。

驚見君のリビングで透明人間さんの経緯を聞いていた母は、終始優しい笑みを浮かべていた。

そして今もその柔らかい雰囲気は変わらない。

ニコツと僅かに首を傾げて、弟一人を諭す。

「ちゃんと説明しないと、家族全員の晩御飯抜きよ。この意味、作り話”を考えられる頭があるなら…わかるわよね？」

最後に『ん？』と語尾を強めた言葉に重みを感じる。

向かいの席に座っていた弟は食事の時に使うテーブルに両手を着き、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。」

セミ取り以降の俺の心情や言動その他もろもろは半分嘘です。透明人間さんのは最初以降はでっち上げです。本当は頼まれた後、直ぐ様『別にいいよ。父さんの許しが出れば』って言いました。調子に乗りました。

お母様本当にごめんなさい。凄く反省してますから、晩飯抜きはどうか止めて下さると大変嬉しいですよ。」

「次は四回目だから、本当にやるわよ。仏の顔も三度まで。」
見えない母の顔は想像出来ず、夏なのにやけに背中が寒かった。

弟と母にはルールがあった。

それが作られたのは、弟の悪い行いが原因。

光を失った弟はそれ以来、面白半分で作り話やデマカセを話して家族を困らせるようになった。

それはとても良く作られていて、家族は毎回騙された。

そこで、裏の大黒柱、鷲見家の母が名案が思いついた。

『“仏の顔も三度まで”という諺があるでしょ。それに基づいて、あなたが三回嘘をつくの許してあげる。でも、四回目には“家族全員”食事抜きよ。勿論、私もね。』

翌日、弟は早くも四回目の嘘をつき、それは実行された。

夜遅くに帰って来た父はお茶だけで我慢した。

事情を聞いても愚痴一つ口にできなかった。

その隣で母もお茶で堪えていた。

姉は弟に状況を説明しながら、何度も何度も背中を叩いて怒った。自分以外の人間が巻き添えになる。

しかも、仕事で疲れた父までも食事無し。

晩御飯だけはなるべく皆で食べようと心がけて、仕事が終わると自宅に直帰する父の横顔を思い出した。

腹を鳴らしながら階段を降り、リビングにいた母に謝罪した。その時、生まれて初めて土下座をした。

しかし、その日の晩御飯は作られなかった。

そんな経験などもあり、弟の嘘を吐く回数は激減。

母は回数をしっかり記憶していて、四回目になるとその日の晩御飯を絶対作らない。

姉や父が何か買って食べることも禁止する。

でも、朝ごはんはちゃんと作るから心配は要らない。

弟は毎回直ぐに謝っているので朝ごはんを食べれるが、もし何もしなかったら朝ごはんまで無しになるかもしれない。

自分一人だけならまだ良いが、“家族全員”が無しになるという条件が負い目を抱かせる。

だが、悪い癖は簡単には直らない。

フウと溜め息を一つ。

ゆるゆると頭を上げた弟に玄関を指差して告げる。

「お父さんには私が説明しておくわ。お客さんを待たせると失礼だから呼んで来なさい。」

「母さんありがとう。」

「次からは気を付けなさい。」

椅子から立ち上がり、右手を前に伸ばしたまま駆け足で玄関に向かう。

壁に手が当たるとそこから慎重になり、玄関に顔を出して『透明人間さん』と手招きする。

それから数分後、例の方法で透明人間さんと母が対面。

しかし、『こんにちは』と挨拶しただけで吸血鬼さんの時同様、驚いた様子は見られなかった。

逆に透明人間さんが驚愕の表情を作り、流石この子の母親、と何故か頷いていた。

母に色々と説明されている間に姉が帰宅。

勿論例の透明人間と会える方法をした。

初対面の透明人間さんに『わ、驚いた』と口に手を当てて、前の二人よりは普通の反応を見せた。

が、すぐ『肌スベスベで羨ましーな。カワイイし、モテるでしょ？』と唇を尖らせて頬に触れる姉に、やはり親子だな、と妙に納得している透明人間さんがいた。

透明人間が泊まる部屋は、姉の強い希望で姉の部屋になった。

ガールズトークがしたいらしい。

明るくお喋りな姉に、積極的に雑談をしない透明人間さんはたじたじ。

何回か弟に助けを求めたが、軽くたしなめられても姉は止まらない。興奮状態の姉は誰にも手がつけられない。

最終的に姉の部屋に引きずられるように透明人間さんは消えていった。

それから数時間、父が帰るまで恋愛話を延々と語られたらしい。

晩御飯の時は弟の隣でグッタリしていた。

透明人間さんは食事を断ったのだが、母が『晩御飯はなるべく皆で食べる。この家の数少ないルールですから』と微笑むので何も言えなくなった。

震える唇を噛み、弟の背中で顔を隠す。

今まで溜め込んでいた不安が溢れたように瞳に溢れ、悟った弟は何

もしなかった。

帰宅した父は説明を受け、食卓で『今日は疲れただろう。ゆっくりするといい』とだけ。

目尻に皺を寄せた父に言葉が出ず、席を立ち頭を下げた。その日の晩御飯の味はきつと忘れない。

風呂上がりの透明人間さんは弟の部屋にいた。

入れ替わりで今は姉が湯船に浸かっている。

ベッドに促されるままに腰掛け、長い髪をタオルで丁寧に水滴を吸い取る姿は色っぽい。

上気した頬に無防備なパジャマ。

充分な目の保養になるのだが、惜しいことに弟は拝めない。残念。

そんな弟は本棚から取り出した点字の本を、爪が必要以上に伸びた指先で黙読している。

それに気づいた透明人間さん。

爪切りがないか弟の机の上を確認するが特に見当たらない。

部屋を見渡すが目的の物は視界に映らない。

仕方ないので下にいた母に聞こうと腰を上げる。

バサッ

開いた窓から聞こえた、翼が羽ばたく音。

大型の生き物が持つ小鳥とは違う大きいモノに、聞き覚えがあった。自分の世界で数え切れないほど耳にした、最も気に入らない種族と言っても過言ではない者のモノ。

急いで窓を閉めようと振り返った先は、黒。

屋根の上で大量のコウモリが羽ばたき、中央には林檎のように赤い色をした瞳の吸血鬼さん^{ドラキュラ}が佇んでいた。

本日のポンチョのカラーは桃色です。

ジト目で見詰められ、吸血鬼さんの薄い唇が開く前に、考えるよりも先に動いた。

ピツシャアアンツツ！！

突然の音に肩を震わせた弟の前でガチャ、と窓の鍵まで閉める。

「ハア、ハア、」

走っていないのに息が乱れ、ドツと嫌な汗が噴き出す。

シャツとカーテンを閉めた透明人間さんに恐る恐る声をかけた。

「透明人間さん、何かあった？」

「……いや、鳥が入ってしまいそうだったから慌ててしまった。驚かせてしまった、すまない。」

「そうだったんだ。」

それにしても、もうそろそろ来ても可笑しくないんだけどなー。」

「？」

パタン、と読んでいた本を机に置き、透明人間さんの隣に膝をつく。ギシとベッドが軋む。

窓のカーテンを開けようとする弟にドキッと心臓が跳ねた。

バササ

「あ、来た来た。」

危険を止めるよりも先に向こう側のコウモリの羽音に気づいた。

嬉しそうな声に疑問が浮かぶが、取り敢えず抱き着いて阻止する。

「駄目だ！危ないからやめろ！」

「え、何が危ないの？友達が訪問しに来ただけだよ。」

あー、大丈夫大丈夫。透明人間さんの血は飲まないように注意してくから。」

何を勘違いしたのか、腰に抱き着く透明人間さんの頭をポンポンと叩いて宥める。

その言葉がスツと上手く飲み込めずポカンとしている隙に、カチャと窓の鍵が下ろされた。

ザアツ

片手で開いた僅かな隙間からコウモリが侵入する。

黒色に囲まれる弟を間近で見上げるしか出来なかった。

瞳孔が開いた瞳が動けるようになったのは、コウモリの主が部屋に

踏み込んだ時。

癖のある髪を靡かせながら優雅な足取りで窓から堂々と入る。

我が物顔の吸血鬼さんに精一杯の虚勢を張ろうと、弟から離れ、怒鳴り付ける為に口を大きく広げる。

横目で透明人間さんを見据える吸血鬼さん。

瞳にはちよつとだけ怒りが含まれている。

緊迫した空間。

だが、場違いな明るい声がぶち壊した。

「ハハッ！君達くすぐりたいよ。」

阿呆面のような顔で声がした方を向くと、弟がコウモリと戯れていた。

楽しみに笑う弟の周りには敵意や戦意の欠片もない、吸血鬼の僕に
シモヘ
しては珍しい大人しい性格のコウモリだけ。

まるで挨拶をするように体を擦り付けたり、キィキィと鳴いている。
信じられない光景だった。

人間を“食料”としか考えていない吸血鬼にはあり得ない。

取り巻きのコウモリならターゲットが逃げないように、周りを取り
囲み体の端に噛み付いたりするはず。

それが羽や体を使って体当たりしたりして弱めるくらいはする。

なのに、全くそれをする気配が伺えない。

友好的にしか見えない。

「嘘だ。」

目の前に広がる光景への驚愕と、記憶の間違いかもしれないという不安が言葉に現れた。

混乱する脳内、ケラケラと笑う弟、それを見守るような眼差しを浮かべる吸血鬼さん。

何もかも、わからない。

弟に青白い手を伸ばす吸血鬼さんに枕を思いっきり投げつけた。
避けることはせず、片手でいとも簡単に払い落とす。

睨む視線に負けじと睨み返す。

「私の友人に触れるな！お前ら吸血鬼は人間に害しか与えない！高等な種族とか何かは知らないが、手を出せば許さないぞ！」

「透明人間さん、落ち着いて。吸血鬼さんは、わぶ。」

訂正しようと弟が近づくも吸血鬼さんが背中に隠し、話を遮ってしまふ。

ポンチヨの感触にこれが誰のかは気づいたが、先に吸血鬼さんが喋る。

「私がどの人間と関わろうと君には関係ない。違うか？」

「っ！だが、」

「確かに、コイツには情けで血を与えてもらっている。“同意”を踏まえての行為に、君はまだ口を挟むか？」

グイツ

隠していた弟を自分の前に出し、長袖のパジャマのボタンを外す。

現状がよくわからず、？を頭に沢山浮かべる。

抵抗する理由もなくされるがまま。

しかし、透明人間さんには吸血鬼さんの行動の意味がわかっていただけさせられた弟の左肩と二の腕の間の曲線に赤い穴が四つ。

上顎と下顎の犬歯が食い込まれた痕で、二ヶ月近く経っているのに中々塞がらない。

触ってみると少し凹んで、穴が空いているのがわかる。

「…っ。」

悔しそうに目を伏せた。

ギリギリと力強く拳を握り締める。

吸血鬼につけられた痕はいわばマーキングのようなもの。

言い換えれば、“これは私の物だから私以外は手を出すな”という印。

こうすれば物好き以外は大抵の者が諦めるし、独占できる。

他にも色々あるが、それはまた今度。

ベロンと傷痕の上を長い舌で見せ付けるように舐めた。

「んっ。」

まだ慣れない感触に掴んでいたポンチョをキュと握った。
声が漏れぬよう奥歯を噛みしめ耐える。

ペタペタと何かを探す手に一旦止め、そつと顔を包む弟を下から仰ぐ。

仕返しと言わんばかりか冷たい頬をムニ―と左右に引っ張り、コツンと軽く頭突きをした。

ペチペチと頭を叩くが全然痛くない。

「もう、お腹すいてるの？それなら言ってくれなきゃ、ビックリしたじゃん。バカバカ。」

「腹は何時でも空いている。だが、食事は明日だ。明日で一ヶ月になる。」

ムスツと頬を膨らませて怒る弟の質問に、吸血鬼さんは正直に答える。

ブチブチ並べる文句を流しながら衣服を整えてやる。

結局、血は一滴も吸わなかった。

本当に明日まで我慢するのだろうか。

グシャリと長い髪を無造作に掴み自分の顔を隠す。

悔しかった。

敗北を味わったような感覚。

ム力つく。

この単語が頭を占める。

「私は謝らないぞ。悪いのはお前ら吸血鬼だ。」

「勝手にしろ。」

静かに部屋を去ろうとする透明人間さんを、空気が読めていない弟が引き留めた。

振り返ると吸血鬼さんのの頭をバシバシ叩く弟の姿。

「そうそう。」

透明人間さん、この吸血鬼さんは口は悪いし、よく俺のことを叩くけど、俺の“友達”なんだ。無愛想だけで悪い奴じゃないよ。気に入くわないことがあれば遠慮なく叩くといい。スツキリするから。」

「オイ。」

パコーン

吸血鬼さんの髪をボサボサにさせる弟の額を平手打ち。

至近距離なので威力も何時もの倍だ。

背中から倒れそうになるが、腰に添えられるように回されていた腕が支える。

二者のやり取りを面白がるようにコウモリが周りを飛び交う。

ジンジン痛む額を手で抑える弟の後ろで、透明人間さんがポツリと呟いた。

「…考えておく。ありがとう。」

おやすみ。」

「おやすみ、透明人間さん。」

聞き取りにくい小さなモノだったのに、弟の耳にはちゃんと届いた。

再会した者（後書き）

「透明人間さんと知り合いだった？仲が悪かったらごめんね。」

「いや、初対面だ。彼女が私を嫌うのは、私が“吸血鬼”だからだ。私と彼女が生まれた世界では、吸血鬼の存在を嫌う者が少なくない。お前が謝る必要はない。」

弟から体を離そうとする。

今、きつと酷い顔だ。

見えないけれど、見られたくない。

しかし、弟は離れなかった。

両手で吸血鬼さんの髪をワシヤワシヤと乱暴に撫でる。

目を開けても見えないけれど、顔を覗き込むように見下ろす。

姉にする慰め方。

ただ黙って髪をボサボサにさせるだけなのに、安心させるような手

つきがとても温かい。

「俺は吸血鬼さんと一緒にいて楽しいよ。」

この優しさに抵抗など不可能。

ニツと歯を見せた無邪気な顔に偽りはない。

引き寄せるように、求めるように弟の体を抱き寄せた。

「その世界では嫌われ者でも、この家の家族は吸血鬼さんのこと嫌いじゃないよ。」

透明人間さんは環境が関係してるから、許さなくて良いから、嫌いにはならないであげて。」

「わかってる。」

スリ

腹に頬擦りをするとかすぐしたいのか身動きをする。

けれど、引き剥がそうとはしない。

「俺には甘えていいよ。たまには息抜きしないと倒れちゃう。」

「…気分だな。」

「もう、吸血鬼さんは素直じゃないな。」

ポンポンと広い背中を叩きながらクスクス笑う弟。

大きな子供に甘えられている気分。

普段は大人で冷静だから、今くらい自由にさせてやろうと思う。

甘ったれから離そうとするまで。

手探りで吸血鬼さんの頬を見つけ、親指で小さく撫でた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2010w/>

鷲見家の弟と、

2011年10月9日14時53分発行